



中嶋 嶺雄

なかじま・みねお(東京外国語大学教授) 1936(昭和11)年長野県生まれ。東外大卒、東大大学院修了。中国研究の権威で文化大革命の学者が争った中で一貫して文革を権力闘争として分析、「北京烈烈」でサントリー学芸賞。ほかに「現代中国論」「中ソ対立と現代」など。趣味のバイオリンはプロ級。

十代後半から二十代前半の私をふりかえってみると、学生諸君やわが子たちにはとても語り得ない恥ずかしい体験も多い。それは早熟と未熟が入り交じった多感な少年時代を送った者に共通することであろうが、そうしたなかで、私にとっても最も衝撃的な出来事は、高校一年生の秋、つまり十六歳のときのわが家の倒産と、高校三年生の終わり、つまり大学受験直前の失恋であった。この後者の体験は、今から考えれば笑って過ごせることもかもしれないが、当時の古いノートが残っていて、私の青春が語りつくされている。

信州松本の町中(中町二丁目)に生まれ育った私は、恵まれた家庭の一人息子として、この十一月二十二日が創立百周年という由緒ある松本幼稚園から源池小学校そして清水中学校を経て、これも創立百周年を昨年迎えた松本深志高校へと進み、いずれもよき師よき友に出会いつつ、華やかな幼少期を思う存分に過ごしていた。手広く業局経営をしていた父が俳人でもあったためか、わが家には著名な画家や俳人、歌人などがよく来訪された。今日、鈴木メソッドで世界に知られる鈴木鎮一先生の門下生として、私は松本音楽院でバイオリンを学び、また水彩画では毎年県展に入選したり、陸上競技でも八

若い日の私

——逆境のなかで知った社会

わが家は中嶋家の本家でもあったので、親類、知人、隣近所などの人びとがこのような事態のなかで頼りなず人間模様の裏と表をいやというほど見せつけられて、私は世間や社会の醜態と、またわずかな人びとの本当の親切とを徹底的に知らされた。今にして思えば、この体験が、私のその後への進路を決めたのであった。

わが家の土地、建物ばかりが借前竹とうや家財まで手放すことになったのだが、そのなかで私が是非残してほしかったのは電話だった。今でいえば高級オーディオ・システムということになるのか。この電話は、恵まれた家庭であったとはいえ、何でも両親から買ってもらうのはよくないと思った私が、家業の手伝いということで松本から約二十キロ離れた北アルプス登山口の馬々宿まで日曜日のたびに自転車に荷台に鞆を積んで一軒々々訪問販売し、そのお金をためて買ったものである。吹雪の目などはアルプスおろしで耳がちぎれるほど寒く、雪の坂道で転んで鞆が一面にばらまかれたこともあった。こうして当時、町中でもだれも持っていないかった大きな電話を特別注文でしつらえ、ガールフレンドを呼んでチャイコフスキーの交響曲第六番「悲愴」を全曲暗記するほどに聴いたりして、とてもうれしかったものである。

この電話も人手に渡ることにになり、両親は私が可哀そうだからと、私の寝ている間にそっと運び出すように頼んだのだが、私は手感がして目が覚めてしまった。二階から電話を運び下す手伝いの人の後ろ姿が、今でもはっきりと脳裏

とられるような形になってしまった。高校一年生の秋の夜、忘れもしない文化の日、私たちが親子三人は、土蔵が二つもある大きな家屋敷をすべて人手に渡して、奥口から傷心のうちに立ち去ったのである。この間、気の弱い父は一時病床にふしてしまい、私は単身上京して製薬会社と再建の相談をしたり、同業者に「なんとか勉強だけは続けるさせて下さい」と頭をさげたりで、学校も長期欠席せ